The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東アジア術数学研究会
Author(s)	清水, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2016, 62, p. 138-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61983
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 光号（総六十二号）平成二十八年六月　一三八―一四二頁

〔研究会通信〕

東アジア術数学研究会

清水洋子

一、概要と沿革

「術数学」とは、古代中国において発生した各種の占術（天文占・怪異占・卜筮・占候・占夢・択日・風水・式占等）およびその基礎理論としての易理や陰陽五行説に代表される数理哲学を含めた占術の理論と実践に関する学問の総称である。術数の文献や理論は、中国において現在まで伝承されるのみならず、東アジア各地域（日本・韓国・ベトナム等）においても受容され現在まで伝承されている。全時代を通じて、術数が東アジアの諸地域に与えたその文化的影響は計り知れない。「東アジア術数学研究会」（以下「本会」）は、時代と地域を越えた広範囲におよぶ東アジアの術数についての検討・考察において、術数学関連研究者同士の連携が必須であるとの認識から結成された共同研究の場である。

〈創　立〉

本会の創立の経緯について述べれば、本会発起人となる大野は、二〇一一年一〇月八～九日に開催の日本中国学会第六三回大会（於九州大学）に二つの術数関連の発表（すなわち前原「張衡『霊憲』の科学思想」および佐々木「中国近世以降における『開元占経』の流伝と受容について」）が行われることを見つけ、これに参加。両者発表後の雑談の中で、大野・佐々木・前原の三者による共同勉強会の開催が提案された。また当時、三者はそれぞれ台湾・東北・関西と遠隔地在住であったため、インターネット通話サービスであるSkypeを用いての勉

強会が企画された。かくしてSkypeを通じて行われた第一回研究会（二〇一一年一一月九日）が本会の結成日となる。この第一回から上記三名に加えて田中が加わり、その後も更に数名の参加者を加え、現在のメンバーとなる。なお、会の名称は二〇一一年一二月二六日の会議において「東アジア術数学研究会」と決定した。

〈参加者〉

本会の主な参加者は以下の通りである（名前、所属・身分、専門、現在取り組んでいる研究テーマ）。

・大野　裕司　北海道大学大学院文学研究科専門研究員、中国思想史、易（数字卦）と陰陽五行の成立過程
・坂井　里奈　杭州師範大学外国語学院助教、東洋史、明代の術数と劉基について
・佐々木　聡　日本学術振興会特別研究員ＰＤ（大阪府立大学）、中国宗教文化史、天文五行占の社会受容について
・清水　洋子　福山大学人間文化学部人間文化学科講師、中国占夢文化史、占夢思想・占夢書の受容と展開
・成　高雅　京都大学人間環境学研究科修士、共生文明学（東アジア文化論）、中国伝統医学文献・東洋医学文献
・田中　良明　大東文化大学東洋研究所講師、中国天文思想・災異思想、天文占辞の増加・変遷
・前原あやの　関西大学非常勤講師、中国天文学史、宇宙論・星座分類の変遷や展開について
・水野　杏紀　関西医療大学非常勤講師、東アジアの思想文化、江戸時代の術数書・食養生と風水

二、活動内容（定例会・それ以外の活動・成果など）

本会の特色はSkypeを通じて研究会を開催する点にある。二週間から一か月に一度程度、遠隔地に住むメンバーがそれぞれ自宅や出張先などから研究会に参加している。会場の準備や旅費なども不要で、国内外からの参加が可能なことから、フレキシブルな共同研究の場を提供し、研究者ネットワークの構築に繋がっている。

主な活動内容は、IDP（国際敦煌項目）やGALLICA（仏国家図書館）などの図像データベース及び各種図版を利用しての敦煌占術文献の検討会である。特に、黄正建『敦煌占卜文書与唐五代占卜研究』（学苑出版社二〇

〇一年、（増訂版）中国社会科学出版、二〇一四年）に沿って、その内容や録文などの検討を行っている。本書は、中世術数研究のメルクマールとなった一冊であり、その後、陸続と発表されることとなる敦煌占術文献研究における最初の総合的専著であった。術数文献には、古代から現代まで継承されてきた内容も多く、ときに通時代的な視点も求められる。本会には古代と近世の思想研究者が多いが、その中間に位置づけられる敦煌占術文献の把握はメンバー共通の課題でもあった。

敦煌文献中には、様々なジャンルの術数文献が含まれ、その全体把握は容易ではないが、研究会では各ジャンルの術数研究者が参加し、最新の研究成果も踏まえて共同研究を行っている。

これまでの研究会は五年間で七八回におよび、敦煌文献に見える各種卜法・占候・夢書・時日宜忌（択日）・禄命・各種事項占・雑占など、多岐に渡る術数文献を伝世文献と合わせて検討することができた。また、二〇一三年一二月には、佐々木が仏国家図書館と大英図書館にて敦煌占術文献の実見調査を行い、その際、出張先から研究会に参加し、原本の所見や閲覧状況などにつき報告も行った。

資料検討会の前後には、各自の最新の研究や資料調査などについて、報告や話し合いを行うことも多く、貴重な情報交換の場となっている。これによってメンバーが各自、中国・香港・台湾・韓国・ベトナム等にて調査を実施した際に、現地で得られた成果や情報についても共有できる。術数文献には、これまで看過・等閑視されてきた重要な抄本・版本がなお多く眠っており、こうした情報交換が、各自の調査・研究の契機や着想のヒントとなり、新規の研究成果に繋がっている。

本会における資料検討や情報交換が具体的な研究成果となったものは、例えば、以下のものが挙げられる。

大野は、本会における唐宋時代の術数学に関する議論を発展させ、日本中国学会第六四回大会にて「陳元靚『上官拝命玉暦』について」という宋代術数学の特色を探る発表を行った。

天文気象や怪異現象などに基づく占術に関する文献の研究としては、本会結成以後、佐々木が「『開元占経』の諸抄本と近世以降の伝来について」（『日本中国学会報』六四、二〇一二年）、「『天元玉暦祥異賦』の成立過程とその意義について」（『東方宗教』一一二、二〇一三年）、『『開元占経』閣本の資料と解説』（東北アジア研究センター、二〇一三年）、前原が「『海中占』の輯佚」（『関西大学東西学術研究所紀要』四六、二〇一三年）、

「『海中占』関連文献に関する基礎的考察」（『関西大学中国文学会紀要』三四、二〇一三年）、田中が「北宋楊惟德等撰『景祐乾象新書』諸本管見」（『東洋研究』一九三、二〇一四年）、「『乾象通鑑』初探」（『東洋研究』一九九、二〇一六年）をそれぞれ発表し、複雑な術数文献の伝本関係と伝来状況を整理し、校本・輯本の作製にも繋げた。さらに、前原はこれらの研究と連動する形で、『開元占経』『観象玩占』『天文要録』のデータベースを完成させた（http://temmon.org/）。

また、清水は本会での情報交換の際に『夢占逸旨』嘉靖刊本の存在を知り、二〇一二年から継続的な調査を進め、その結果を踏まえて、「夢書の受容に関する一考察―『夢占逸旨』を例として」（『中国研究集刊』六〇、二〇一五年）を発表した。

これらの成果はいずれも海外所蔵文献の調査が不可欠であった。メンバー間での調査や資料収集の協力などを行い、また、海外の図書館の利用法や規定など、現地に行かなければわからない情報を共有することで、スムーズな調査にも繋がったのである。

また、二〇一三年七月に行われた京都大学人文科学研究所術数学研究会（代表・武田時昌）主催の「術数学国際ワークショップ二〇一三―七」では、二日目（二〇日）の術数学ワークショップpart2において、本会メンバーによる報告が行われた。発表題目は以下の通りである（発表順）。

前原あやの「中国における星座分類の変遷」
田中　良明「敦煌文書と『乙巳占』」
大野　裕司「択日術の歴史的変遷に関する考察」
佐々木　聡「祥瑞災異思想の中世以降の展開について」
清水　洋子「清末民初の「心理学」における夢と占夢初探」

以上は、いずれも本会での報告・討論を経て、問題関心を共有しながら、各自進めた研究の成果と言える。

三、研究会情報

本会は研究誌や会報などは発行していないが、メンバーそれぞれが、積極的に学術誌等に論文を発表している。また、ブログ・ツイッターにて術数関連の学会の情報、新刊図書等の情報の発信を行っている。

・メール：shushu1109@gmail.com
・ツイッター：http://twitter.com/jutsuuushushu
・ブログ：http://d.hatena.ne.jp/jutsuuu/

四、今後の予定

これまでの敦煌占術文献の検討から、データベース図像や図版を見るだけでは不十分であり、原本の実見が必要な資料のあることが分かってきている。したがって、今後の展望としては、まずは、研究会チームとしての海外所蔵機関での調査が必要不可欠となる。

そこで、競争的資金の獲得も念頭に置きながら、本研究会の活動をプロジェクト化していくことが、当面の目標となる。

同時に、会としても、国内外の関連分野の研究者らとネットワークを構築することで、国際的な研究プロジェクトへと発展させていければと考えている。

将来的な目標としては、海外調査に基づく成果をまとめ、シンポジウムを開催し、論集の刊行にこぎ着けるべく、尽力していきたい。